

建仁寺総長：坂井田良宏  
京都大学総長：山極壽一  
建仁寺庶務部長：浅野全雄  
京都大学教授アーティスト：土佐尚子

(敬称略)

中津

始めさせていただきたいと思います。

今日は雨の中、「パトロンとしての寺と芸術家座談会」にお越しいただき、大変ありがとうございます。

皆様お待ちかねですので、前置きを省きまして早速始めさせていただきたいと思います。

まず最初に4人の登壇者の方のご紹介だけして、後はバトンを渡したいと思います。

まずは、皆様から向って左側ですが、建仁寺総長の坂井田様でございます。

坂井田

坂井田でございます。

会場

(拍手)

中津

それから、建仁寺庶務部長の浅野様でございます。

浅野

浅野でございます。

会場

(拍手)

中津

皆様向って右側ですが、京都大学総長の山極先生です。

会場

(拍手)

中津

それから、京都大学教授の土佐先生です。

会場

(拍手)

中津

それでは早速前置きを省きまして、山極先生の方が全体を通していただけるという事なので、山極先生にバトンをお渡したいと思います。  
よろしくお願いします。

山極

こんにちは。

会場

こんにちは。

山極

今日は総長が二人も居るということで、私の京都大学の方が119年、そちらは1000年に近いというすばらしい歴史を誇っているところなので、とても私達は足下にも及びません。  
今日は芸術家のパトロンとしてのお寺という事なのですが、私はお寺というのは、言うならば、人々の不安や安心というものをしっかり握って、それをきちんと形にする。そして人々の心を一つにして、現在の生き方の幸せに向ってどう生きてらいいのかを諭していただけるものだと思っています。  
この建仁寺もずっとそういった歴史をたどってきたのだと思います。その中で芸術というのはとても重要な役割を果たしたのではないかと。というのは、私は一人の科学者でもある訳ですが、人間というのは猿と共通の祖先を持っています。  
私の専門はゴリラの研究なのですが、ゴリラと（人間は）何が一番同じかということ、人間にとって、五感を使ってこの世の中を感じ取っている訳ですが、一番リアリティのあるものというのは、視覚を使って感じた事なのです。その次が聴覚を使って感じた事、

あとの嗅覚や味覚や触覚というのは、  
視覚や聴覚というものに向うときに使う手がかりなのです。  
リアリティを感じるものというのは、まず見ないとはいけません。  
何か変なおいがするなと思ったら、  
そのにおいの元、原因を見に行く。  
何か変な声が聞こえたら、その声の主を見たいと思う。  
ですから、見る事が真実なんですね。  
これは猿も全くそうなのです。  
ですから、見えない世界というものは確信が持てない、  
しかし、見えない世界に我々は取り巻かれている訳です。  
そのもとをたどると人間というのは生物として重力を感じる地上に暮らしている哺乳動物の  
一つです。  
しかし哺乳動物に進化するために、我々は水の中から地上に上がり、  
そしてこの世界を手に入れました。  
この世界の真実は視覚世界の中にある。限られている訳です。  
しかし、水の中から出てきた訳だから、重力を今とは違う感じで感じていた時代があるし、  
これは例えば赤ん坊がおなかの中で、羊水の中でまずは暮らし始めるようにですね、  
水の中は実はノスタルジーを感じるような世界なのです。  
我々は既に経験している。でも、もうそれから離れてしまったという感覚です。  
そして、でも、空中にはまだ我々は到達していないのです。  
浮遊感覚というのは人間にとってまだ奇妙な経験ですから、それになれない。  
だからそれは憧れなのです。  
そこは不安というものと同時に、期待というものが積もっている、込められた世界でもあります。  
だから我々人間の持っている神話というのは必ずどちらかにルーツを持っていると思われま  
す。  
それを宗教の側というものは感じさせてくれる場所なのですね。  
それを我々は声に出した言葉によって感じる事になっているのです。  
しかし、今申し上げたように声だけでは、言葉だけでは感じられない世界があるのです。  
しかも、それをみんなで共有するためにはどうしても視覚でそれを表現したいと思います。  
実は視覚というのは、人間にとって共有の一番大きな部位なのです。

「何かにおうよね」

「うん、におう」

でもそのにおいのにおい方、そのにおいの本質というのを共有する事はなかなか出来ない。  
でも、

「あれ見える」と言ったときに、

「ああ、見える」と言う、

その感覚というのは、あなたが見ているものを私が見ているという感覚なのです。

これは、すごく強い共有感です。

そういうものを得るために、私は芸術というものはお寺の中で非常に昔から、重用されてきたものなのではないかと思います。

芸術は、宗教そのものではありません。

芸術というのは時として、その思想に反するようなものも描いてしまうことがある。

だから、危険と裏腹なのです。

しかし、人間は不安と憧れというものの狭間で生きていますので、

どちらかに触れる事によって人間は生きている実感を得る事が出来る。

それをきちんと現実の世界に着地させてくれるのが、

お寺という場所のあり方だろうと思っています。

ちょっと言い過ぎかもしれませんが、

前置きとして私の考えを述べさせていただきます。

今日の土佐さんの作品というのはご覧になったら「ああ、そうか」と思われるかも知れませんが、

まさに、その水中感覚と空中感覚の両方を表現している作品だと思います。

いわゆる水中の動きと、そしてこちらに並んでいる飛行機の中から出た雲の動きというのは、

いうならば人間のルーツと人間の憧れというものを両方感じさせてくれる作品になっているという風に思ひまして、今日のこの場にふさわしい、刺激的な作品だと思いました。

少し褒め過ぎですが。

土佐

どうもありがとうございました。

それでは、パトロンとしてのお寺と芸術家というテーマですので、

歴史的にちょっと振り返ってみたいと思うのですが、

このお寺には皆さんご存知の風神・雷神、俵屋宗達が、江戸初期の17世紀の初頭ぐらいに生きていた、職人兼芸術家だと思いますけれども、(そういう方が)おられまして、その風神雷神図を、

奉納されているお寺として、有名でございます。

この奉納にまつわる話を、ぜひ建仁寺さんの方から、少しお話をいただきたいのですが、いかがでしょう。

坂井田

ようこそおいでいただきました。ありがとうございます。

昨日、一昨日ですか、今、京大の総長さんの方から、話がございましたように、

雲の上の山水という山水画と、水の中の様子をという事をおっしゃっておいりました。

その作品展という事で、昨日から10月15日まで開催するという  
ご縁がありまして、

今日はこういった座談会というかたちで、お座りをさせていただいております。

建仁寺といえば、皆さんご存知のようにご開祖は栄西禅師です。

栄西（えいさい）と学校で皆さん習われたと思うのですが、

「どちらや？」ということで色々あるのですが、

栄西（ようさい）が正しくございます。

栄西禅師という事でございまして、

岡山の吉備津神社の神官の子としてお生まれになられたのですが、

小さい頃から、非常に宗教に対して関心をお持ちでございました。

親も非常に熱心な宗教に関して気持ちをお持ちでございましたので、

十三歳で比叡山で登られ、そして天台の勉強をされたのですが、

ちょうど時代的には末法の頃、そういう時代にかかっておりまして、

宗教的に少し乱れがある時代でもございましたので、

それと自分自身ももう少し、天台教学を深く勉強したいということで、

中国の宋へ渡られるという事でございます。

入宋を待たれたという事でございまして、

年齢的には28歳の時と47歳の時、二度入宋されておられます。

今でしたら中国というのは飛行機で、船でもすぐ行けるのですが、

当時はやっぱり命がけで渡られたという事でございまして、

いかにその信念が強かったという事が計り知れると思います。

そういったことで、中国一回目は、もちろん先ほど申しました天台の勉強をしようというこ  
とで行かれたのですが、

時代は変わっておりまして、中国、南宋禅という禅が、起こっておりまして、

それで、

「あ、私は天台教学勉強しようと思ったけど、事情はだいぶ変わっている」

という事の認識の元に、帰られています。

一年あまりで帰られていまして、

二度目は、本当は、インドの方の天竺の方に行こうという事で出向されたらしいのですが、  
残念ながら嵐で押し戻されたということで、

天台山の万年寺というところで最終的には、虚庵懐敞という和尚さんについて、禅の勉強を  
されたという事です。

在宋5年という事で、5年間きびしい修行をなされて、それで日本に禅を伝えられたという  
事でございます。

これは皆さん歴史で習われたとおりでございます。

その中で栄西禅師、少し話が長らく飛んでおりますけれども、

禅を日本に伝えられるとともに、もう一つ日本に持ってこられた一番大事なものが、お茶な

のですね。

お茶の種を持って帰られて、我々毎日こうして朝になるとおいしいお茶を飲んでおります。また、お茶を深くやっておられる方は、茶道という形でね、武野紹鷗とか千利休が広めましたが、

当時はもちろん、そういう道としての方向に行くとは栄西禅師は思ってまおりませんでした。それで、もともとは座禅修行の妨げになる眠気ですね、それをのぞくためにお茶が必要だという事で、

日本に持ち帰られたのが、最初でございまして、

それが我々毎日飲んでいるお茶でございまして、

非常に体が、茶は養生の煎薬という喫茶養生記があるのですが、

そこにも書かれているように非常に体にいいという事でございすけれども、

そのお茶を広めたのが栄西禅師であります。

そんな事で、建仁寺のちょっと簡単な縁起でございすが話をさせていただきました。

それで、歴史的にはもう800年以上の歴史を有する京都で一番古い禅宗のお寺という事でございす。

それで、この建仁寺といえば皆さんすぐ頭に思い浮かぶのは、

先ほど先生方がおっしゃっていられましたように、宗達の風神雷神図の屏風でございす。

この宗達の絵、もともとここにあったということなのですが、

建仁寺派ではありますけども、宇多野の妙光寺というお寺があるのですが、

そこがちょうど再興されるときに、打它公軌さんという豪商がおられまして、

その方が今いうパトロンというか、スポンサーというか、そういうところで、資金をお出しいただいたということで、再興された祝いとして奉納されたのが最初らしいです。

これも今津洪嶽という和尚さんが語られている話でございすので、

その真偽については断言は出来ないのですが、そうであろうという事でございす。

ちょうど妙光寺の63世の和尚さんで、それから、その和尚さんが、全室慈保という方なんですけれども、

建仁寺の348世の住持になられたと、建仁寺に来られる事になったと、

そのときに、風神雷神図の屏風をこの建仁寺に持ってこられたのでは無いかという事でございす。

風神雷神図の屏風についてはいろんな解説本が出ています。

これも色々な学者・先生方がいろいろ書いておられますので、

私が説明するべきではないと思います。

ご覧いただいて、建仁寺もいつでも公開しておりますので、ご覧いただければいいと思いますけれども、

当時としては非常に斬新な絵でございまして、風神雷神というのは昔から自然を守る神という事で、

よく描かれていたそうでございまして、

当然、宗達もその辺を参考にはしているのですが、北野天神縁起絵巻というのがあるのですが、その雷神を参考にモチーフに描いたといわれておりますけれども、風神はそれを元に似たような格好で描かれたという事でございます。

しかし、そういう風神雷神を枠からはみ出んばかりに描かれている、躍動的な風神雷神を描かれているということで、未だに人気があります。

風神雷神図屏風、どこで出しましてもすごい人です。

建仁寺でも今、14、15年前に建仁寺に、もちろん博物館に寄託しているのですが、建仁寺へちょうど里帰りしたのですが、すごい人でした。

もう券を買うだけでも長い列ができていた、というぐらいに人気でした。

今は非常に若冲が人気がありますけども、やはり、

なかなかの人気があるのは風神雷神ということでございます。

そういった事で、妙光寺から本山の方に来たという事でございます。

パトロンといいますか、その辺にしては先ほど言った打它公軌さんという方が、

そういった事で妙光に出して寺の援助をなされたということで、

建仁寺に来るご縁ができたという事でございます。

後庶務部長が詳しいでございますので、ちょっと話をしてもらいます。

すいません、無知ばかり。

浅野

ちょっと補足をさせていただきますけれども、

宇多野の妙光寺、今、総長がおっしゃってございましたけれども、

もともとは無本覚心、法燈国師という方が鎌倉時代開山になって開かれたお寺なのですが、日本に味噌・醤油を紹介したお坊さんです。

非常に隆盛を極めたのですが、五山制度の時は十刹の第八番目に、大徳寺が九番目だから大徳寺よりすばらしいお寺だったのかも分かりません。

その後だんだん衰微して、江戸の初期に非常に廃れておりました。

それをなんとか法燈国師の寺だから復興したいという事で、

誰に頼もうかという事になるのですが、

結局建仁寺末の高台寺、秀吉と寧々のくらいですね、

そこのご開山の三江紹益という方に頼む事になりました。

実際に動いていたのはお弟子さんということらしいです。

この三江紹益の禅のお弟子さんに木下長嘯子がおりました。

歌の名手ですね。

寧々さんの甥になるのですかね。

この木下長嘯子にも話が行きまして、

「誰かええ人おらんかな」という事なのですが、

ちょうどあの長嘯子の歌のお弟子さんに、  
先ほど申しました打它公軌という方がおられました。

代々、糸屋十右衛門を継いでいる  
織維問屋だったのですが、

すごい豪商で

「京都三条糸屋の娘」と言ったら、あのお店なのです。

すごい豪商で金持ちだったので、この方に銀方を依頼することになりました。

そして妙光寺が復興していくのですが、

いざ出来て、何か什物らしきものがないので、

「なんか絵画作品を」ということだったらしいです。

宗達に依頼したのかよくわかりませんが、

宗達は生年月日も没年もさっぱり分からない、謎の方なのですが、

一説には西陣の唐織屋に居たという話があります。

また、専念に絵を描いて商っていたという説もあります。

今までの通常の説は妙光寺のために描いたのだらうという事で、

西陣で唐織屋をやっておれば、俵屋にもいるので、

そこに織維問屋の打它公軌が出入りするの極当たり前に考えられる事で、

宗達と面識があったのだらうと。

そして、妙光寺に何か作品をとということで、打它公軌が宗達に依頼したか、

もしくは、打它公軌が一生懸命復興しているので宗達がそれを寄進したか、

どちらかだらうという話があったのです

ところが最近毎日新聞に記事がちょっと出ていたのですが、

「西陣の俵屋宗達とこの風神雷神をかいた宗達は別人だ」という

「同名異人だ」という説を説いている先生がおられて、

なかなか面白いなあという事で、ちょっとして拝見してもらいますけれども、

角倉了以はご存知ですか、

そのお子さんに素庵という方がございまして、

貿易商で、商家でもあるのですが、

この方が宗達と親交があったらしいのです。

まあ、貿易商なもので、中国から色々な書籍を仕入れていたらしいのですが、

その一部に仏画を描いた本があったらしいので、

それを宗達に貸し出ししていたらしいのです。

別の方がその本を貸してほしいとって、

素庵に頼んでくるのですが、

宗達の所に行っていますので、頼んできた人に手紙を書いているそうで、

それが残っているそうなのです。

それは、「六原ノ絵かき」と書いてあるのです。

六原というのはすぐそこなのですが。

俵屋宗達はそこに居て、「風神雷神を描いたのはこの宗達ではないか？」となったのです。

当時仏画を描いている絵描きというのは宗達ぐらいしか居なかったそうなのです。

だから、これを描いた俵屋宗達は西陣に居た俵屋宗達とは別人で、

この方を風神雷神の宗達だということです。

北野天神縁起の雷神をモデルにしたと言われているのですが、

あれは菅原道真の怨霊が雷神と化してきたというので、北野天神縁起には書いてあるのですが、

ところがこの素庵と言う方は非常に体の弱い方だったらしいです。

晩年嵯峨の方に暮らしておりまして、亡くなる前、50過ぎで

ハンセン病にかかるのです。

財産を全部子供に譲って自分は小さな家で粗末な生活をしていたらしいのですが、

そのうち亡くなってしまって、化野に葬られるらしいです。

宗達はその素庵の慰霊のためにこの風神雷神を書いたのではないだろうか、

だから、風神雷神像は普通赤い肌なんです。

ところが、宗達の（もの）は真っ白ですよ。

それは、やっぱり、ハンセン病で皮膚が非常に白かったのではないかとされておりまして。

それから風神の方はね、宗達、自分を書いたそうなのです。

非常に仲がよかったものですから、一緒に並べたそうです。

西の方に葬られているから、中国では西の方が白、西の白虎、東の青龍、

風神はせやから緑で描かれているのです。

それから、これは素庵を供養するために描いたのではなからうかという説があります。

宗達が鶴の絵を描いて、そこに本阿弥光が和歌を書いているのですが、国宝になっておりますが、

あの和歌を書いたのはこの素庵だと言っているのです。

本当だったら日本中大騒ぎになってしまいますけれど。

素庵と筆跡がそっくりらしいです。

そういう事であれば、公軌がすばらしい作品だと言う事で宗達の絵を購入していた、それで妙光寺に納めたのかなと思います。

その後打它公軌は風流人でお茶会を催したり、歌会を催したり、長嘯子も呼んでやっていたのでしょ。

それと同時に色んな文人、墨客が集まってきて文化サロンみたいに発達していくのです。

仁和寺の隣なのです、妙光寺が西隣にあります。

それから野々村仁清がそこら辺にいて、作陶をやっている、妙光寺にも来て、

妙光寺に今お墓が残っています。

西の方には尾形乾山が釜を持っていて、

乾山も妙光寺に寄って、茶会でもすればお道具もいるから、焼き物を焼いていたのかも分か

りません。

それと同時に、もうちょっと後になると尾形光琳が乾山に絵付けをしに行っておりまして、その帰りに妙光寺に寄って、風神雷神を模写したという風に言われております。

それから文人、墨客、芸術家、そんな者が非常にたくさん集まってきて文化サロンを形成していく訳なのですが、

それからお寺という者は文化の発祥地であると同時に、芸術家達はその才能を発揮する場所でもあったのです。

この建仁寺にも海北友松の絵が50面のこっておりますが、

お寺というのはそういう芸術家達のキャンパスなのかも分かりませんが。

それと同時に、建築もそうです。

色んな伽藍を建てる建築技術、それも継承していく、お寺ですので仏像も作ら無いといけません。

仏像を招魂するためにはお厨子もいるし、色んなお飾りも要ります。三具足があったり、金粉があったり、漆があったり、そういった技術も発揮する絶好の場所であったのだらうと思います。伽藍があれば前に庭も造るし、作庭の技術もここで庭師達が発揮していく。

そういう芸術家あるいは職人達の技の見せ所がこのお寺として古い時代から今の時代もこうやって、行っているのではないかなと思っております。

坂井田

すいません長くなりました。

土佐

いえいえ。

いや、滅多に聞けないお話で大変興味深く聞かせていただきました。

私も、今、奉納させていただいて、この作品はどうなっていくのだろうかと、

ちょっと頭の中で色々めぐっております。

ちょっと遅ればせながら、作品を展示しております土佐と申します。

少し作品の説明も入れながら話を聞いていただければと思います。

まず、皆さんの方から向ったら右手の方になります、その12軸の「雲の上の山水」ですが、

この絵、筆を一切使っておりません。

今の技術で山水をつくりました。

私がアートを創る信念として、仏像ですとか、ああいう、エジプトのピラミッドに見られるように、

作られた時と言うのは最先端技術でそれは作られると思うのです。

ですから、

その時代のやはり先端技術でアートを作っていくということが重要なのではないか、  
という事で、

工学もコンピューターサイエンスも勉強しました。

それでこういう雲の写真を、飛行機の窓から見える雲の写真だけを取り出して、  
いつも撮っていたのですが、

非常にスランプの 때가4年くらい前ありまして、打破しないと行けないとっていて、  
ちょっとした鬱だったのですが、なにか行動しなきゃという事で、

いつも飛行機に乗ったときには窓から写真を撮る事と、毎週お寺に行って写真を撮る事をやっ  
ていたのですね。それでたくさんの写真がたまっておりましたので。

禅にはかなり前から傾倒していました。

京大にくる前にMITにいたのですが、その時には「禅コンピューター」という、  
禅問答をするコンピューターのシステムを作りました。

そういうあれもありましたので、

山水が作れるのではないかという事で、いろいろ試行錯誤して、2012年に作ったものでご  
ざいます。

このような形で4年後ですね、掛け軸にさせていただいて、本当にまた全然違う形で見えて、  
非常に印象深い作品が出来ました。

ですから、この山水というのは、ご存知の方もおられるとは思いますが、桃源郷でございま  
す。

「この世に無い場所」なのです。

昔から憧れの場所、そこに行ってみたい、「一種」の今で言うレジャーランドだったのです。

そこに行ってみたいという事で憧れる場所、その絵を掛けてその絵を見る事によって心がそ  
ちらに行くのです。

憧れの場所、そこで遊んでみたい場所、そこにすんでみたい場所、最後はそこで死にたい場  
所、そういう場所なのです。

ですから、そういうものを、どう描けばいいかということを考えました。

あともう一つ私の考える所なのですが、一番クリエイティブになる時ってというのは欠除して  
いる時だと思うのです。

ですから、非常に、何かが無い時とか、何かを欲しい時とか、何かに行き詰まっている時は、

実はクリエイティブな時なのだなと思います。

欠除しているので、それを打破しようとしている訳なのです。

ですから意外とそういうエネルギーが無い鬱の時に作った作品が、

「これでもか、これでもか」と自分がもがいている姿だったと、そこにエネルギーが出て、  
意外とエネルギーがある作品になったのかなと思っています。

もう一つこのお寺、ここの廊下を歩いて来たところに木が浮いている写真があったと思いますが、

これは建仁寺の管長が非常に大事にしておられたカナメモチの木です。

それも、本当にもう30度くらいの角度で根から伸びています。

もうほぼ、地面につきそうな感じで、もちろんつい立てみたいなのはあったのですが、それも非常にスランプの4年くらい前に写真を撮りまして、作品にさせていただいたのです。

そういう木は聞くところによると風雪200年耐えた木だったそうです。

昨年度の雨期でこの世から去っていった、そういう事ですね。

という事で残念ながら、そこのお庭には無いのですが、そこのお庭ににあった木が、30度くらい傾いて200年風雪に耐えた木、人間で言うと老人です。

その老木にもすごいエネルギーを感じました。

命と言いますか、そういう物を感じまして、作らしていただきました。

このお庭は、私が説明するのも何ですが、こちら側にあるのが静と動を表しているらしく、こちら側が動の世界、動きのある世界、向こう側が静の世界、動きの無い世界で、たまたまだったのですが、私のつけたタイトルは「静寂」だったのですね。

それとやはり、びっくりしましたが、イメージが一緒でした。相通じる物があったのだなと思いました。

そういう動きのない世界。しかし物凄いエネルギーを感じるような世界。やはりそういう物を描きたいと思っております。

私はアーティストなので、こういう風に説明もしますが、言葉にならない事を表現したいと思っております。

こうやってしゃべっておりますが、しゃべっている事と描いている事には物凄く差があって、それはやはり作品を見ていただければと思います。

それから、右側の方なのですが、これは山際先生から、水の世界、液体と言われましたが、液体を使っております。

一番最初の床の間にはですね、

皆様をお迎えするための床の間を出来（しゅつらい）とさせていただきまして、

従来あそこには、建仁寺のお坊さんが書かれた掛け軸があったのですが、

それは外させていただいて、

作品を、映像で床の間を飾らしていただいております。

これはですね、ドライアイスペインティングといってもいいような、ドライアイスが描く物を作り出しました。

一種の現象なのですが、アートの的に作り出した現象です。

ゲル状の液体の中に、平たく言えばゼリーの固まる前の液体の中に、55度くらいの液体の中に、ドライアイスを入れます。

そうすると、ドライアイスはマイナス25度くらいで、温度差があるので皮膜ができます。

それが反射する形になります。

その動きが、白い物はドライアイスが作り出す気泡なのですが、それがどう動くかによって、こういう動きが生まれてきます。

この動きは裸眼では見えない動きで、実はハイスピードカメラで毎秒2000コマで撮っております。

ですからこの現実の時間を100倍くらいにのばして、見えてくる、でもここにある世界です。

コンピューターグラフィックスではないし、コンピューターグラフィックスで表せる流れの可視化の世界でもない。

でもここにある物で、そこに美を発見したので、それを作品にしました。

「ジェネシス」という起源とか聖戦とかそういった意味合いのものです。

あと手前に8キロくらいの重い本があるのですが、

作品集としてcanonのドリームラボの販促で作った仕事なのですが、

「looking for japan」という「日本を探して」という本でして、これは山極総長に前書きを書いていただきまして、国立国会図書館に納本するのですが、

「いままでなかった日本」「今まで気がつかなかった日本」という事をテーマに作った本であります。

こういった物をここで展示をさせていただいて、皆様にお伝えしたかったなと思うのは、

私たちアーティストというのはギャラリーとか美術館とかで展示して、

成功するというのは、ステータスとしては美術館のコレクションになるというのを目指す人が多いと思いますが、

それだけではなくて、もう少し、この京都という特別な場所で、

お寺との関係によって、建仁寺さんがおっしゃられたように、

お寺が一つの芸術のサロンになるような、一つの動きというのは今でもあって、

それを私たちの世代の物が、継続して進めて、

こういうITですとか、私の仕事のアート&テクノロジー、アート&サイエンス、と言われるような技術によって表現している世界ですけれども、

そういう物が新しく入ってくる事によって、また一つの時代といいますか、文化が生まれてくればよいなと思っております。

その辺、山極先生の提唱する京都アカデミアと繋がってくるとは思いますけどどうでしょうか？

山極

どうもありがとうございました。

先ほど、総長や庶務部長の話を伺っていると、

お寺というのは文化人のサロンとして昔からやってきたのだとおっしゃられていました。

パトロンというよりサロンなのだと仰っておりました。

これは大学と似ているのですが、

お寺も寺子屋と言われるように教育の場でもある訳です。

現在でもお坊さんたちが色々学んでらっしゃる。

大学もそうなのです。

これからの大学経営のあり方を考えると、サロンのなもの、

要するに自然科学や人文科学だけを学び、教え、研究する場ではなくて、

色々な京都という場所を生かした伝統芸術に携わる方々が、サロンの事を考えながら、

やってきてくださる場所でもあってほしいと私は思っております、

大学が京都全体にある。

それを「京都アカデミア構想」とよんでおります。

少しお寺さんに学ばせていただきたいなと思う事があります。

先ほど、土佐さんは、芸術家のパトロン、あるいは芸術家が芸術を奉納するというような、

お寺とのやり取りの場所であるという事を意識して発言されましたが、

むしろ、場所を提供して、色々な文化を醸成する場所だとも考えられます。

例えば建築家を育てる。

まずはお寺の様々な意匠を作るために建築家の方々が智慧をしぼったのだと思ったのですが、

それもまたお寺以外の場所にも発見するわけです。

絵画でも、陶芸でも彫刻でも、色々な意味合いがあったのだと思いますが、

それはどういう考えに基づいて、そもそもそういう文化サロンができたのか、

お寺というのがどういった場所だったのか少しお聞きできればと思います。

浅野

色々な経緯があるのですが、

基本的には芸術家たちが精神性を求めて問答にやってくるというのがあったようです。

この辺、近くに花街がひかえておまして、昔は芸者さんや舞子さんまでが修行道場の老師と問答されるような時代もありました。

基本的には精神性を求めてやってきて、そこで精神の安らぎを得て、

出来上がった作品をお寺に奉納する。

まもなく土佐先生も毎月の座禅会にこられる事だろうと期待しております。

土佐

承知いたしました。

私だけでなく生徒も来るようにお約束いたします。

山極

西洋の基督教の教会も、芸術家がそろって、建築や絵画を作っていたのですが、私の印象では、教会というと圧倒的に絵画というのは神様、というよりイエスキリストとマリアです。

そういった絵が描かれていて、

イエスキリストが降誕され、復活するというストーリーにそった図がメインでたくさん描かれているのですが、

もちろん日本のお寺さんでも仏画というのは大変多くありますが、

それ以外にも先ほどおっしゃられた陶器でしたり、

色々生活に関わるような物、あるいは工芸に関わるものが、日本特に京都では多かったように思います。

そういった精神性というのが、西洋の基督教を中心とした精神性と少し違うように感じたのですがその辺はどのようにお考えでしょう。

浅野

禅宗の面白いところに、ほかの宗教というのは宗祖信仰というのがあるんです。

最澄信仰だったり、弘法さまの信仰であったり、親鸞であったり法然であったりという、そういう信仰があるのですが、禅宗の信仰は釈迦しかないのです。

ですから色々な芸術家や建築家がよってくるのは、その時代その時代の住持の徳をしたってよってくる方が多いです。

ですからその時代の住持が尊敬に値する住持でなければならないのが基本にあります。

羅漢みたいな物で、供養を受ける資格を持っている。

尊敬に値しない坊主さんには、誰もそういったものを奉納しない。

その時代その時代のすばらしい住持に奉納するという事です。

それと歴史という事もありますが、基本的にはすばらしい住持がいらっしゃるというのがあると思います。

坂井田

先ほども庶務部長が言うておりましたように、

そのときそのときのお坊さんの資質が一番大事です。

あとは、先生も禅に関心をお持ちですが、

その辺の参禅と申しまして、

その辺を目的でお寺に近づかれたと思います。

それと芸術の精神性を高めようと思っておいでになったケースが多いです。

土佐

お寺のお坊さんと、

例えば昔の京大の先生と一緒に何かを行った例とかはありますか？

私たちがよく聞くのは、

お寺とは関係ないのですが、

色々な例はありますが、

何かそういう例もありましたか？

京大の先生じゃなくてもよいのですが、

そういう京都の大学の先生とかと、

お寺のお坊さんが何か文化的な事を行った例というのはありますか？

山極

これは大学側の答えなのですが、

宗教系の大学もありますし、

探検隊を出したり、

そういうのがあって、

文化財を探索したり、それを保護したり、その歴史を調べたりということは、ずいぶん盛んにやってこられたと思います。

先ほど総長や総務長が、「精神性」という言葉を仰られておりました。これは芸術につながる言葉だと思いますし、実は大学にもまさに思想・精神性ということを教えている先生方はたくさんいらっしゃると思います。

禅宗の本文的な考えは「空」ということとお聞きしました。質素になるということが一番美しい、人間の生き方であると。

まさに私の学問的な経験からいうと、人間が動物と一番区別されるところというのは、人間は所有というものを始めてから、大きな色恋とともに大きな苦しみも背負ってしまったと思います。

狩猟採集から農耕へという、あの大きな転換が人間の生き方というものをすごくドラスティックに変えたのだらうと思います。

その所有というのは際限のないものです。物を持つとどんどん物を持ちたくなる。

現代の科学技術も、資本主義という思想も、やはりその所有というものを、個人の欲求を満たす方向へとずっと流れてきました。それは、恐らく一万二千年前に農耕が始まって以来の人間の生き方そのものなのです。

それをひっくり返して、むしろ所有というものを否定して、何も持たない、むしろ持つことを避けることというのを人間の美と考えたのは、非常に逆説的な発想で、しかし、だからこそ、所有とは違う考え・想像力というもの生まれるのです。

それが恐らく救いということにつながる。救いというと宗教集が強いんですが、むしろ安心とか、安寧とかそういうものにつながると思います。

つまり所有ということを断念することによって、実は人間は他の動物や生き物と同じ地平に立てるということです。他の動物や植物たちは物を持っていませんから。物を持たなくなることによって他の生命とつながりができる。だから人間という領域を超えて生命のつながりというものを実感できる。

それを端的にやっているのが芸術だと思います。

芸術というのは、所有という概念が似合わないものなのです。

もちろん色々な形あるものは作ります。その形に、物凄い値段がつくことがあります。

でも面白いことに、その物についてはその値段の本質的な理由というのが見当たらないのです。

他の物は機能とか、色々な理由がつけられて値段が付けられます。

でも芸術性というものには、あるいは美というものには、価値に理由が見つからない。

そこが恐らく、禅だけのものではないのかもしれませんが、宗教が持っている、いわゆる所有を排したところにある考え方にすごく繋がっているような気がするのですが、

大変生意気なことを申し上げましたが、どう思われますか？

浅野

私どもの修行の生活というのは、いらないものをすべて全部切り離していくというものです。

持てば持つほど、求不得苦（ぐふとくく）という苦しみがある。求めているものが得られない苦しみ。

それは持とうと思うからそういう苦しみが生まれてくる。

もともと何もないところで何も求めなかったら、そういう苦しみは起こってこない。

それが先生がおっしゃっている、「持たない」ということだと思います。

土佐

禅の美術の例にとっても確かにそうだと思うのですが、

日本の美学にもつながるのかもしれませんが、

「粹」という考え方もそうだと思いますし、

あと枯山水にもそれをみます。

中国の庭園には水があるのです。

しかし、それが日本に来た時には水がなくなるのです。

枯山水というのですが。

水を砂というか砂利に変えて波紋を描くのです。それはやはり、禅のというか日本の美学につながると思います。

なくしてなくしてなくして、最低限のところにもしさを感ずる。ミニマムな美です。そういうことと、禅の美学と云ってよいか、禅の美術、には物凄くつながると思っています、何か迷ったり、模索している時はそういうところに戻ります。

坂井田

禅の庭もまさにその通りだと思います。

今まで水があったところをなくして散らすなり波紋を描いてということなんです。

今、庶務部長が申しました通り、

できるだけ無駄な物は削ぎ落とすというのが基本でございますので、

先ほどちょっと言っておりました通り、

人間の物というのは追求めたらきりが無い

求不得苦（ぐふとくく）であり、五蘊盛苦（ごうんじょうく）ともいうのですが、満ちあふれていても、何となくむなしい気持ちになる。

これは、今から2600年前にお釈迦さんが仰った、四苦八苦の一番大事な部分でもあるのですが、

五蘊盛苦（ごうんじょうく）ということ、いつまでも際限がないということ、

先ほども先生がおっしゃいました通り、無駄なものを削ぎ落とす、

そういう世界そのものでございますので、

そういう体験、実践をする宗教というのが禅でございます。

チエというのは二つあるんですね。チエの工が恵じゃないほう、

般若の智慧のほうが普通の知恵じゃない方なんです。

誰でも生まれもって仏さまの心を持っている、というのが禅の教えなのです。ですからそれに目覚めるために、建仁寺においても座禅会を行っております。

なかなか1回2回、座ったところで、仏さまの本来人間が持って生まれた純粋な心に到達はできないのですが、近づくことはできるということと、

先ほどありました、欲望、我執をできるだけ捨てるということは、日々これはできることですので、そういったことに近づく意味でも、禅のお寺に足を運んで頂くのは大事なことかと思っております。

土佐

質問があるんですが、

臨濟（りんざい）ですよね。

臨濟（りんざい）は禪問答が中心ときいていたのですが、  
曹洞（そうどう）のほうが座禅ということがよく本に書いてあるのですが、  
私が非常に疑問に思っていたのは、禪問答が作られた時期っていうのはすごく古いですよね。

最近はそのような禪問答というのは作られているのでしょうか？

極めて素朴な質問なのですが。

隻手の音声（せきしゅのおんじょう）とか瓢箪鯨（ひょうたんなまず）とか「ああ、なるほどなあ」と思いますし。拈華微笑（ねんげみしょう）とか、納得するものがあるのですが、それくらい最近の人は、また新しく作られているのかなと疑問に思います。

浅野

修行道場の師家によってはあらたに作られている人もいます。  
話をまとめた本がありますので、それに従っているのですが、  
白隠が一部修正して、  
隻手の音声（せきしゅのおんじょう）とかは、またつくったりしております。  
最近できた問答をされているのをちらっときいたことはあります。  
ないことはないです。  
その人その人にあわせてそういう問答集を作るといのは多々あることです。

土佐

それは通常、お坊さんがつくられるのですか？

浅野

そうです

師家（しけ）といわれる いわゆる大学でいったら先生みたいな人が  
修行僧を見ながら、とりあえず決められたものがあるので、それを一応クリアした人  
その人に対してやられることもあるし、  
例えば在家の人がお見えになったらそれなりのものを用意されている、お師家さんもおられますね。

土佐

なるほど。

山極

大学でも、私は学生たちによく、問いを作りなさいといいます。

研究者たるもの、問いをうまく作れなかったら研究はできない。

要するに答えられない問いというのはいっぱいあるのです。

問いというのは「何故」から始まる、「どうして」「どのようにして」などいっぱいあるのですが、

それに対する答えというのをどういう形で作るかというのが、まさに研究という分野になります。

これ自然科学においては、証拠を持ってこないといけないのです。

あるいは、その答えが、誰がやっても同じ答えに行き着かなくてはならない。

それが自然科学の世界の鉄則なんです。

ところが、自然科学というのは実は。人間の思想、あるいは考え方からすれば、ほんとに一部にすぎない訳で、人間がたてる問いには、一様な答えが得られないものがたくさんあります。

例えば、「何故あのとき交通事故にあってしまったんだろう」

という問いは科学的に答えようと思えば、ある答えを用意することはできます。

例えば、「自分が信号を不注意で見ていなかったから」とか、あるいは「相手が自分を見ていなかったから」とか色々なことがあり得る訳ですが、

「何故、私はあの場所にいたのか」と問いをたてると答えられない。これは自分でも答えられないのです。

ですから、実は人間の生きていて出会ういろんな現象には、自然科学でたてた問いによって答えられるものと答えられないものがあるのです。

私は、人間が持っている不安というのは、むしろ自然科学では答えられない不安というものに根ざしているような気がするのです。

何故かというと、人間が常に自分が選んだ他者、仲間とだけ生きている訳ではなくて、他の人たちが不意に自分の生活圏に入ってきて、自分が予想しているものとは違うものを始める。

それについて自分はどうやって応答したらよいのか、というのを、後から説明するしかないからなのです。

つまり、自分が経験によってこういうことに対してはこういう風に応答するべきだという風に、常に確信して行動できる訳ではないからなのです。

だから、その場でやってしまったことを後で解釈して、「ああ、あのときはとっても良いことをしたな」と思える場合もありますし、

「あの時もしこうしていれば、こういう風になったのにな」と思って後悔する時もあるわけです。

そういうことが、どんなに行いのいい人間でも、きちんと、自分の予測通りに進むことができないから、人間というのは不確かさに囲まれていると思うのです。

結局、物語というのは後付けで、過去を振り返ってあのとき自分がこうしたからこうなって、こうなったからああなったというストーリーを自分なりに作るだけなんです。

いろんなストーリーがあり得たし、しかもそのストーリーの作り方によっては同じ行為でも別の解釈の仕方があるのですが、そういったストーリーなしには、つまり自分の行った行為を後から眺めて、何らかの価値づけをしなければ、人間というのは生きれない、という動物だと思うのです。

それに対して、自然科学の問いだけでは答えられない。

であるとすれば、他の答えがどうしても必要になる。

そのために、やっぱり物語化ということが必要で、

そして宗教は、そういったものに答えてくれる一つの考え方だと私は思っています。

そのときに宗教というのは、信じるのが第一ですので、そこに自然科学のような具体的な証拠はいつもいる訳ではない。

しかしそのときにそれを信じるための確信というのが必要なのです。

そのときに人間の五感というものが総動員される。

そして、私が最初に申し上げた通り、視覚というものがその時に、やはり大きな道具となって、我々の確信をつくるのです。

「我々がどういう世界に生きていて、しかもどういう世界とつながっているんだろう」という確信を得る。そして、それをもちろん言葉で解説する訳ですが、それを実感できないと、つまり言葉で解説し眼で見たものを他の五感で納得しないと、やはり人間というのは、その精神性というものを内に取り込むことができないのではないかと思います。

芸術というのは、自然科学という相性というよりかは、精神性と大きな相性があるのではないかと思いますのでどうでしょうか？

土佐

それは、私の専門がアート&テクノロジーとか、アート&サイエンスというものなのですけども、

その間にですね、やはり精神が入っていると思います。

アートとサイエンスとか、アートとテクノロジーをつなぐ間に、コンセプトといってもいいですし、哲学といってもいい、精神といってもいい、そこには何らかの、計算では出てこない、証明では出てこない、科学技術では出てこないルールは、やはり人間が作るのです。

どういう規則によってこれをつなげるか、ここが一番重要なポイントだと思います。

意外と、こういう新しい技術を使った作品というのは、技術ばかりいわれるケースがマスコミの報道でも多いのですが、

しかし、そこで、色々な精神だったり色々なコンセプトを作る。そこが結構重要なところで、そこに、アーティストというのは、物事の自分が考えた心理というのを置くのだと思います。

それは、レオナルドダヴィンチのころからやっていたのだらうと思います。

彼は色々な心理を知りたくて、解剖もやったり、科学もやったり、モナリザのような絵を描いたりしたのだらうと思います。

私は宗教というのを、禅というのを、宗教というよりかは一種の哲学だと捉えています。

実は私は、子供の頃は仏教の幼稚園で、小学校から高校までは、遠くにあるキリスト教の学校にいったのですが、その後、禅に触れて、最近は神道にも触れましたが、だんだん自由になってくるのです。

キリスト教というのは、子供の頃からそういう学校にいましたので、主要5教科のテストにも現れる訳ですね。みことばの意味を書け、とかです。神様がここにいるのです。

神様に対して、謝ったりお礼を言ったりしなくてはならなくて。

仏教というのは、心のここにいるんですよ。死んだら仏様になるっていうじゃないですか。

そして、その違いというのはものすごく感じました。

禅というのは哲学的な要素が強いなと思って、それで非常になじみやすいといえますか

キリスト教みたいに、強制的ではないところがあるなと思いました。

それで、私も、山極先生がいわれた通り、その、精神性の中で、自分が描くものの対象として、禅を、ある意味禅を、選んでいるといえるのかもしれませんが。

非常に禅に傾倒しているのですが、

そういう禅が持っている様々なスピリッツだったり、哲学というものを、

少し、ほんとに少し作品の中に入れたい。

作品のなかに入れるときには、描くのではなくて、最先端の技術をつかってやる。

そうやって、歴史の中で、作るときっていうのは、これも重要なんですが、

子供の頃、美術の時間にある絵っていうのは、自己表現ですよ。高校、大学ぐらいまで、自己表現なのです。

なぜかという、もっと世界のことを知らないからだと思います。

大人になってくると、自分の周りの社会がどうなっているのかということだったり、もっと世界がどうなっているのかだったり、対象を描く、対象を表現するようになると思うのです。

その中で非常に重要なところは、私にとって重要なところは、対象物として歴史の中で自分は何を描くのか、ということ。

通常だと、美学美術史をみるんですけども、

今までの作家もアーティストも全部美学美術史の中で自分はこの辺のことをやる、

やってこなかったことをやらないと存在価値がないのです。

そういった視点で大きな長い歴史の中で表現するということも、とても重要なのではないかと思います。

ちょっととびとびになってしまいました。

山極

すいません。私だけ喋ってしまいました。

禅がどうかはわかりませんが、宗教と芸術、とりわけ絵の共通性は感動なのです。

やはり心に訴えかける。ですから精神性という話になると思うのです。

例えばキリスト教だと、ここに倫理が入ってくるのです。非常に強い倫理観というものが天から与えられる。神様から与えられる。

だから、西洋は個人主義になってもやって行けるのです。

常に神様が上から見ていて、「お前のやっていることは悪いことだ」といつてくれるので、そういう倫理観を共有するので、

個人が個人として個人の自由というのを、倫理にそぐわない形で発揮することができる。

これが彼らの社会です。

しかし、日本は、中国・韓国がどうだったかわからないですが、

日本はそういう個人主義を基に発達してこなかったのだと思います。

それは一信教というものではなく、もっとはじめてから自由な、許容性の高い文化・社会を作ってきたからだと思うのです。

そのために、得てして強い倫理観というのを失いがちなのです。

ですから、西洋的な個人主義を今取りいれると、完全な利己主義になってしまう。

つまり、個人が個人の利益を高めよう、あるいは、個人の所有物を増やそう、個人の自由度を拡大しようとする、他人の自由を浸食することになる。

そこに、押さえようとする倫理観がそれほど強く働いていないので、個人がバラバラになり、尚且つ、言うなれば孤独に陥っていく、というのを我々は見ていると思います。

今、まさに、我々が抱えているのは、人間関係とか、そして死に対する態度なのです。

それがまさに、解決できない問題として、すべての日本人が、日本人だけではないとは思いますが、抱えている問題だと思っています。

その死に向かう気持ちというものを、どうにかしてきちんと捕まえていてくれるのが、宗教なのです。

科学はそれをまったく捕まえてくれません。せいぜい寿命を延ばすとか、あるいは臓器を少し改良して人間の力を増やす程度のもので、

死というものをどう迎えるか、そして、他の命とのつながりをどう我々が考えるかということに対して、何の答えも用意していないのです。

それは人間の持っている科学技術とは違う想像力がそこには必要になる。

人間関係もそうなのです。

しかし人間関係は我々がなんとなく甘く見ている訳です。

なんとかなるだろうと思っているわけです。

しかし、恐らく死以上に大変なことで、あるいは、死というものも通して考えなければならぬものなのです。

テロリズムがそうです。あれは、死を賭して破壊しようとする行為な訳です。

そういうものを我々は芸術にしている。

そのときに、例えば、ずっとその精神性に、芸術が加担をしてといいますか、大きな助けとなりその精神性を差えてきていたのだとしたら、芸術はそういったことに対して、これからどういう助けになりうるのか、ということだと思います。

総長と庶務部長にあえてお聞きしたいのは、

文化サロンというものをずっと大きく展開してきて頂いて、その精神性を色々な角度から高めようとしてこられたと思うのですが、

今後その、今我々現代人が抱えている2つの大きな不安、「他の人間とどう生きたら良いのかということ」と、「死に対するところがまえ」。

そういうことに対して、人間のどういう感性に訴えかけていったらよいのでしょうか？

もちろん参禅というのは一つの実践的な方法だというのは十分承知しておりますが、なにか良いお考えがあればお聞きしたいなと思います。

いくなれば、むしろ私はアカデミズムという科学をやっている学者たちと、人間の想像力と精神というものをずっと探求してこられた宗教家の方々とこれからうまく手を結んでいかなければならないだろうと思うのですが、なにかサジェスションを両方からいただければと思います。

坂井田

一番目の人間関係ですが、これは非常に難しい。それと死という問題、大きなテーマを総長から、あげて頂きました。

禅の場合は、「他人との境界をなくす」ということです。

自分がかわいばかりに自分を守る、ということは逆に相手を排他的に攻撃する、ということになりかねないのです。

やはり、仏教では我執（がしゅう）というのですが、それをできるだけ、先ほども申しました通り、少なくしていくのが大切だと思います。

他人と自分との境目をなくしていく。そういうかたちの中で、まず家庭から、夫婦から、親と子から、それから地域社会、国へという格好で広がっていければということなのです。

禅の本文（ほんもん）はそういうことですので、やはりそういう、エゴイズムといったものをなくすというものしかないと思います。

それとあと「死」ということに対して、

禅はあまり、「死」ということに対して、あるいは「死後」のことに対してあまり述べないのですが、

やはり、一日一日の積み上げが一生だという風に申しておりますし、

その一日を一生懸命、三昧（ざんまい）という言葉がありますけれども、

そういう形で生ききる、これが禅の基本です。

そして、その積み重ねがその人その人の人生であり、

それが、振り返ってみたら良い人生だったという風にいえると思います。

「死」に対しては、やはり、この世に生を受けた以上は必ず「死」というものは待っており

ます。

当たり前のことなのですが、それはおいておきまして、地獄極楽という言葉がありますが、毎日毎日の生活を極楽の思い極楽の気分ですごく、ということで、やることを、必ずその日にすます、一生懸命三昧になってやる。

その積み重ねが自分のそれぞれの人生になってくると思いますし、その結果が「死」というものになってくると思いますので、

「死」とは、といういきなり大きな命題を与えられるとちょっと困るのですが、全体的な考え方としてはそういうことであります。

浅野

その人間関係ですが、玄関をあがってきて頂いたら、

大きなつい立てがありまして、

「おおいなるかな心（しん）や」

と書いてあります。

これ、この開山の柴西禅師の『興禅護国論（こうぜんごこくろん）』の一番最初に出てくる言葉です。

「こころとは大きなもんだな」ということですが、

人間というのは本来仏さまと同じ、美しく大きな大きな心を持っている。許容力のある心を持っている。

しかし、普段の生活の中で、心を、せっかくの大きな心を、小さく小さくして使ってしまうので、他人とぶつかり合ってしまう。

本来ある、大きな心を自覚しましょう、というのが

「おおいなるかな心や」ということなのです。

「死」につきましても、いつまでもしないと困りますよ。

形あるものは必ず滅す、というのが仏教の考え方で、このマイクだってマイクスタンドだって、いつまであるかわかりません。

人間のスパンで考えているので100年くらいで考えておりますが、何千年たったらどのようになっているかも分からない。建物やその机だってどうなっているかわからない。

人間だって、生から死へとながれていく。

「生死（しょうじ）のたとえを知らんと欲すればしばらく氷水（ひょうすい）をもって例えん」

という詩があります。

「生と死をいうなら、氷と水に例えましょう」という意味です。

氷が溶けたら水になるし、水が結んだら氷になる。

ですから人間も生と死があって、非常にきれいな人生になる。

こういう風に、いわれているのです。

形あるもの滅する、これを無情というのですが、仏教というのは、その無情感から始まって  
おりますので、それを当たり前だと思うようになるというのが大切な事です。

一番これが難しいのですが、

それを当たり前だと思えるように、これから毎月、

第2日曜日、午前8時から座禅会をしておりますので、ぜひお越しただけたらと思います。

それと、今東京の国立博物館で、10月18日から、臨済禅師（りんざいぜんじ）1150年・  
白隠禅師（はくいんぜんじ）250年遠諱記念で「禅、心を形に」という展覧会があります。

白隠さんの墨蹟（ぼくせき）がいっぱい並んでおりまして、

禅の教えをわかりやすく絵にされたお方が、白隠禅師さん

という方ですので、機会がありましたら、東京の方がおられましたら、

一度お立ち寄りいただけたら、何かちょっとしたヒントがもらえるかもしれませんので、

ぜひお立ち寄りいただけたらと思います。

土佐

山極先生のご質問はいつも、聞くと重いのですが、

ふと思ったのですが、私はアーティストという側面と、京都大学の教授という二つの側面が  
ありまして、日々、しゃべったり、考えたり、描いたりしているのですが、

一つだけいえることは、何か作品作るときに傲慢になると悪いのです。

良いものは決してできない。

それだけは確かです。

ふと思ったんですが、傲慢な、邪なことを考えながら作るとだめです。

失敗します。

それだけはいつもそうだなと思っていて、

屏風にある絵も色々ありますし、

今まで作品もいろいろ作りましたが、

そこはいつも一緒です。

私が禅を学んで一番大事なことは「平常心」だと思いました。

そういうものを持ちながら生きていくというのが、多分大事なことだと思います。

確かに、人間関係のなかだけのほうが平常心を保つのが大変で、

作品というのは人ではないので、レスポンスはもちろんあるのですが、

きちんとした心で、きちんとした心と言いますか、素直な心でと言いますか、

本当に邪な心を全くもたない形でやると、それなりの答えが出てくるのです。

ですから、人間関係はなかなかそうもいかず、色々立場とかもあると思うので苦労するの  
ですが、

そういった「平常心」というのは大事かなと思います。

それと、

「死」に関しては私はとても楽観的で、ある日突然訪れるものなのだろうなと思います。

そこに対しては、個人的にですけれども、いつ死んでも良いように、

禅の心構えではないですけれども、一日を全うするという事は、個人的には心がけております。

そこに関しては、あまり名残ですとか惜しいことはないのです。

大学とお寺に対する具体的な案、ということをお話しさせて頂きたいなと思うのですが、

実はですね、総長がアートな大学を目指してと仰っていたので、昨年一年、「京大おもろトーク-アートな京大を目指して-」というテーマで、年4回くらい行いました。

色々なアーティストと京大教授、それからもう一人で、やってきました。そのフィールドワークをふまえて、アートサイエンスユニットという一つのグループを作りまして、活動しております。

次の京大おもろトークはですね、10月17日の午後6時15分から京大の国際イノベーションセンターのホールでやるのですが、こちらの前列におられます、京大の工学部の医療工学のご専門の富田先生でしたり、若い方ですと、私の教え子なのですが、私の研究室で、アートをずっとやっていた、うちの研究室にいた時間が一番長かった人なのですが、北野貴章君という人。みなさん7時からテレ朝で「しくじり先生」という番組があるのはご存知ですか？

結構、人気番組で、見ている人が多いらしいのですが、自分がテレ朝にアシスタントディレクターとして入ったのですが、毎日遅刻とか失敗ばかり、しくじってばかりいたらしいのです。

そこで、この自分のしくじりをテレビ番組のテーマにして、「しくじり先生 俺みたいになるな」という番組を作ったところヒットして、30歳でチーフディレクターになったらしいのです。

その彼と後もう一人は、東映のチャンバラ映画を日本一みているという、

高橋さんという東映の京都撮影所の制作部長の高橋さんと3人で、「矛盾を孕んだ想像」というテーマで行うのですが、もしよろしければ是非お越しいただければと思います。

10月17日の午後6時15分からです。2時間です。

それから、こういうものを、そろそろ京都大学から出て、

例えば、こういう建仁寺さんとか、テーマに合わせて、大学の外で「京大おもろトーク」を行っていくのも、ひとつ新しいものを見つける手段だと思います。

形式から入るので、

何が生まれてくるか、という事は未知数でいえないのですが、

新しいものと新しいものがぶつかれば、何か生まれると思いますので、

そういうことも一つの方法論で、今までとは違う場所で、違う形で、外は雨ですが、

こういう場所で、何かを学んだり、皆さんと語り合うという事は、大学の中で生まれなかつ

た思考が生まれると思います。

もっと自由になれると思います。

やはり学内にいると、教授を演じなければいけないので、枠がせまくなるのですね。

それを取っ払うというのが、「一生懸命」建仁寺さんがいわれておまして、

頭ではわかるのですが、これを行動で出すというのが、やはりなかなか難しいと思います。

そこを取っ払うことによって、他人との境界を作らない。

これも、私が禅に引かれた一つの理由です。

どういう形で、他人と線を、他人との境界を作らないようにやればいいのか。

結構、真剣に考えました。

一つの結論としては、私の場合は作品がそうです。

行動とかコミュニケーションでは、意図的にではなくても結果的に本当ではないことを言うことはありますが、作品には嘘はつかない。

それを通じたコミュニケーションというのが、一種、他人との境界を作らないコミュニケーションになっているかなと思います。

その点ですね、山極先生は、ふと思ったのですが、人間以外のものともコミュニケーションをとられていますよね。

## 山極

たぶんこれが、最後の話になるとと思いますが、。

ずっとゴリラを研究してきましたから、ゴリラの世界に入って人間を眺めるということをやってきたので、今日冒頭にそういう話をさせて頂きました。

人類の進化、チンパンジーとの共通祖先から分かれてから700万年、たっているのですが、恐らく宗教性というのが出てきたのが80万年くらいに火を使い始めてからだと思います。火というのは人間に他の動物にはない感性をもたらしました。

しかし人間の芸術性というのは、恐らく7万年くらい前の、「認知革命」つまり言葉を話すようになってからなのです。

これは、7万年前、ちょうど、南アフリカの海岸沿いにある、ブロンボス洞窟というのがありますが、ここに赤色オーカーという顔料が出てきて、これによってなにをしたかは想像たくましくできるのですが、固形物が残っている以上、この色を自分の体に塗ったのだと思います。これはすごく大きな転換でした。

それまでライオンのたてがみとか、クジャクの羽みたいに、取り外すことのできない装飾性というものを動物というは纏ってきました。

それはディスプレイなのです。

しかし人間はテンポラルに取り外しのできる、色々な装飾品をそれ以来作れるようになったのです。

ヨーロッパに4万年くらい前の壁画がでてきたり、装飾品がどんどん出てきました。つまり人間は、外部のものを使って自分を飾るようになり、それをまたさらに外部にいろいろ作

るようになったのです。

これが芸術の始まりです。

恐らく、それ以前に宗教性、つまり人間の精神というのは変わっているはずですが。

それは、言葉によって飛躍した。

何かといいますと、今、総長がおっしゃられた、他人との境界を外すということです。

それは、憑依なんです。

他人との境界ばかりではなく、植物にも動物にも、あるいは、岩にも、川の流れにもなれる。

その言葉の持っている大きな力です。

それによって人間の想像力は圧倒的に広がったのです。それを、まさに物として表現できるようになったのが芸術です。

しかし、そのことによって人間は自分を失ってしまったわけです。

ゴリラはそんな自分を失いません。しかも物語も必要ありません。物語をゴリラは作っていません。

人間はそれが必要になってしまったのです。

自分を逆に失ってしまったのです。

そこが多分、人間の人間たる所以だと思うので、これは私の勝手な考えですが、その根元に宗教と芸術の起源があるのだと、思っています。

そういうことが、いろいろと話しあいを通して今日は勉強になりました。

これから、土佐さんがおっしゃったように、こういったトークを是非させて頂きながら、色々な我々の持っている知識やそういうものを広げていきたいと思えます。

土佐

また新しい、京都の文化サロンを作っていきたいと思えます。

中津

それでは時間が参りましたので、話が弾んでおりますが、

このへんでお開きにさせて頂きたいと思えます。

雨の方が強くなっておりますので、足下に気をつけておかえりいただければと思えます。

本日はどうもありがとうございました。